

豊作を願い、鉾を振るう



向笠で使用する鼻高面。古くから残る面は蔵で保管されている

平安時代末期から鎌倉時代にかけて、京や大和から広まったとされる王の舞。嶺南地方では「オノマイ」と呼ばれ、16の神社で奉納されている。その一つ、若狭町向笠の国津神社では、三つの社殿の前で奉納する。四村からなる氏子が、今日まで伝統を守り続けてきた。

若狭で「オノマイ」と呼ぶ 民俗芸能、王の舞

鼻高面をつけた男子が鉾を手に舞う、王の舞。神への報謝や、豊作の祈りが込められている。

その起源は定かではないものの、一説では、平安時代末期から鎌倉時代にかけて、京や大和の大社寺で行われていた舞が全国に伝わったと考えられている。

「京は遠でも十八里」といわれた嶺南地方。京との経済的なつながりが強く、特に多くの神社で王の舞は奉納されてきた。現在は16例が確認されている。王の舞を「オノマイ」と呼ぶのもこの地方ならではの。

今日、王の舞は獅子舞や田楽といった民俗芸能とともに伝承されている。その様式は、若狭の中でも地域によって異なる。

子どもが舞う閭見神社や、1時間以上舞う宇波西神社など、衣装や舞いまで、地域ごとの文化が継承されている。

共通するのは、鼻高面と鳥兜、鉾のみ。王の舞という呼称がなければ、

起源を同じくする神事だとは気づきにくい。

700年以上の時を超え 村々が独自の作法を継承

若狭町向笠にある国津神社の王の舞は、天満宮、国津神社、神明社と並ぶ三つの社殿の前で、毎年4月3日に奉納される。700年以上前から伝わりとされ、保管されている面は江戸時代の作と鑑定されたものもある。その歴史的価値が認められ、王の舞を含む国津神社の神事は、1956年に県の無形民俗文化財に指定された。

向笠の氏子は、王の舞と獅子を担う興(越)の村、流鏝馬を行う流鏝馬(矢武勇)、田植えの舞を実施する大村、田楽を舞う田楽の四村(講)からなる。

祭の準備は、各村の当屋が担う。祭前日には、椎の木で降神の場・オハケをつくる。その後、全当屋がそろって世久見浦へ向かい、裸で海に飛び込む禊・コオリカキを行う。

3日の本祭は、「モノモー(物申す)」という大声から始まる。講員は

田植えの舞が始まる。獅子は渡御に加わるだけで舞わず、流鏝馬も行わない。

「以前は流鏝馬も実施していましたが、弓が観覧していた武士に当たった事故が起り、謹慎となったそうです」と話すのは、元若狭町議会議員の河原一夫さん。ボランティアとして、観光客に祭の説明をする機会が多く、2017年に、内容を分かりやすくまとめた資料を作成した。

現在の生活に合う 新たな形を模索

行列が神社境内にたどり着くと、いよいよ社殿の前で奉納が始まる。向笠では、独身の青年が舞手を担う。鼻高面に狩衣、括袴が鮮やかな赤であるのも特徴だ。



(上)1975年の渡御の様子。獅子の後ろに並ぶ大御幣(おごへい)は、人身御供の様を表している(左)1975年の神事。王の舞以外は場所を移動せずに舞い、終了後に舞手を追いかける

若狭地方に春の訪れを告げる風物詩、王の舞 村々で醸成された伝統の作法を新たな世代へ



村立ちの様子。「ヤーコーハイヤー」という高らかな掛け声は、「赤ん坊や子ども元気で栄えよ」という意味を持つ



河原一夫さん 流鏝馬の村の出身。実際に流鏝馬が行われるところは見たことがなく、実施が中止された年も定かではないという

天照大神から生まれたアメノオシホ(ミノ)ミコトと、その子であるニギギノミコトの二柱を祀る国津神社では、鼻高面は猿田彦の仮面とされる。猿田彦は『古事記』や『日本書紀』で、ニギギノミコトの道案内役として登場した。王の舞は「イヤ」の掛け声と締太鼓の音に合わせ、鉾で四方をくく、三角を描くように回す、両手を腰に当てて上半身をそらせるなどの所作を行う。同じ動作を三つの社殿すべりの前で奉納。その途中から、田楽、田植えの舞が順に始まる。手前は緻密に計算されており、三つの舞はほとんど同時に終わる。

奥の村の舞手は、王の舞を終えるやいなや、鳥居に向かって全速力で駆け出す。ほかの三村がそれを追いかけて、王を突き倒すことができれば、その年は大豊年になる。舞初めから逃げ去るまでの時間は、わずか6分ほどだ。

年によっては、舞の終了がずれる場合がある。王の舞は素早く舞を収め、先導する役割の鉾持ちに手を引かれて大急ぎで逃げるという。神事の日は固定のため、平日の場合は学校や仕事で参加できない人も多い。氏子の減少もあり、徐々に参加者が減っている。河原さんは「村ごとに役割を固定しているため、別の村の氏子が手伝えないのが悩みどころです」と話す。村によって転出した親戚への声掛けで、人数を確保している。

「神事継続のために、今後は工程全体の見直しをしていきたい」と河原さん。次第書と細かな口承によって引き継がれてきた作法を守りつつ、現在の生活様式に合った神事の進行方法を模索する。

長年にわたり受け継がれてきた国津神社の神事、王の舞。これからも赤い鼻高面が天を見上げ、狩衣が風にひらめくことを願う。

information 国津神社の神事 4月3日[水]

■ところ/若狭町向笠13-28
■時間/13時~15時半ごろ※天候によって前後する場合あり



舞手のそばには、先導役の鉾持ちが控える